

いかるが 斑鳩町

～先人から受け継いだ「和」の精神で新たなまちづくりに取り組む～

奈良盆地の西北部に位置する斑鳩町は、法隆寺など世界的に有名な歴史文化資源に恵まれており、古来の歴史・文化が魅力のまちです。また大阪方面への交通の利便性が高く、戦後はベッドタウンとしても発展してきましたが、2000年をピークに人口は減少に転じています。そのような中、2021年4月に新たな総合計画をスタートさせ、豊かな地域資源を生かした新たな取組みを進めています。

I 概要

1. 地理・歴史

斑鳩町は県西北部に位置する人口27,303人（県内39市町村中14位）、世帯数10,330世帯（同15位）、面積14km²（同32位）の町である（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2015年））。

聖徳太子が斑鳩宮を造営し飛鳥からこの地に移り住んだとされており、中世以降、太子信仰の中心地として集落が形成された。近世には法隆寺の門前や龍田村（後の龍田町）が市や宿場町として栄え、明治の廃藩置県を経て、1947年（昭和22年）、旧龍田町、旧法隆寺村、旧富郷村が合併して現在の斑鳩町が誕生した。なお「斑鳩」の名の由来は諸説あり、一説には「イカル（斑鳩・鶴）」という鳥がこの地に群をなしていたためと伝えられている。

町の地形は標高316mの松尾山を最高点とする矢田丘陵から大和川にいたる南に向かってなだらかな傾斜を持ち、町の南端を東から西に流れる大和川が、南流してきた富雄川、竜田川と合流している。丘陵部は早くから開け、法隆寺をはじめとする寺院や旧街道、旧集落など歴史的景観と一体となった自然がみられる。

JR関西本線法隆寺駅からは、快速で大阪市内中心部に約40分、JR奈良駅に約10分で到着するほか、国道25号が町の中心部を東西に走っており、交通網が充実している。



旧集落と法起寺

特に大阪方面への通勤に利便性が高く自然環境にも恵まれていることから、高度経済成長を背景に大阪のベッドタウンとして開発が進められた。

2. 産業構造

従業地による就業者人口（15歳以上）の産業別割合を見ると、第1次産業が3.5%、第2次産業が25.3%、第3次産業が71.2%と、奈良県全体（順に3.4%、22.2%、74.4%）とほぼ同じ構成となっている（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015年））。

民営事業所数は746か所（県内17位）で従業者数は5,531人（同17位）。製造業において金属製品製造業が事業所数、従業員数ともに最も多いことが特徴として挙げられる（総務省・経済産業省「経済センサス活動調査」（2016年））。

3. 人口構造

年齢階級別人口移動を見ると、20歳代前半の転出超過が大きい。就職を機に関西圏の他都市や首都圏に転出する人が多くなっている（総務省「国勢調査 移動人口の男女・年齢等集計」（2015年））。

斑鳩町の位置図



II 町の活性化に向けた様々な取組み

同町は、2017年11月に就任した中西和夫町長のもと、豊かな地域資源を活かした地方創生・地域活性化に取り組んできた。

2021年4月、新たに「第5次斑鳩町総合計画（計画期間：2021年度～2030年度）」を策定し、直近の社会経済状況の変化を踏まえた新たな施策を推進している。

1. 総合計画～「和」で紡ぎ 未来へ歩む 私たちの斑鳩～

新しい総合計画のテーマは、『「和」で紡ぎ 未来へ歩む 私たちの斑鳩』である。先人から受け継いできた聖徳太子の「和」の精神をもって、住民一人ひとりが多様な価値観を尊重しながら、世代を超えて支え合い、未来へ歩んでいくまちを将来像とした。聖徳太子の教えは時代を超えてこの地に引き継がれ、まちの新たな発展の精神的支柱となっている。

このテーマを実現するため、斑鳩町だけが持つ魅力、財産を生かし、横断的かつ戦略的な施策展開をはかることで、「住み続けたいまち」、「住んでみたいまち」、「訪ねたいまち」の実現を目指していく。これから地域計画においては、地方が自ら考え方行動することが重要となるが、聖徳太子ゆかりの歴史・文化資源など唯一無二の地域資源を有する同町だけが持つ魅力・財産は多く、施策展開のポテンシャルは高い。

第5次 斑鳩町総合計画 基本構想 まちの将来像（まちづくりのテーマ）「和」で紡ぎ 未来へ歩む 私たちの斑鳩

まちづくりの基本的な考え方

1. 安全・安心、快適にくらせるまちを創ります

基本目標1. 安全・安心にくらせるまちにします

基本目標2. コンパクトで質の高い持続可能なまちにします

2. 子どもから高齢者まで笑顔が輝くまちを創ります

基本目標3. 子どもの未来が輝くまちにします

基本目標4. 誰もが健やかに生き生きとくらせるまちにします

基本目標5. つながりを大切にするまちにします

3. 歴史文化資源を生かし、活力とにぎわいのあるまちを創ります

基本目標6. 魅力に満ちた活力あるまちにします

基本目標7. 悠久の歴史と文化、自然を大切にするまちにします

2. 地方創生への取組み

新しい総合計画では、同じく2021年4月からスタートする「第2期斑鳩町まち・ひと・しごと創生総合戦略」をまちづくりの重点施策として位置付けており、地方創生を総合計画に組み入れることで効率的・効果的に施策を実施していく。

同町では近年、20歳代後半から30歳代の転入者が増加しており、4歳未満の幼児の転入が多いことを合わせ、子育て世代の転入による人口の社会増加がみられる。同町では独自基準の学級編成による少人数教育の充実など、子育て世代をはじめ転入・定住の促進につながる取組みを進めているが、今後の人口減少対策と地域活性化はまちづくりの最重要課題であり、SDGs（持続可能な開発目標）の17のゴールと施策を関連づけ、総合計画と地方創生、SDGsを一体的に推進していく。

3. 観光振興・まちづくりへの取組み

○観光地としての魅力

同町には、世界文化遺産である法隆寺・法起寺をはじめ、その始まりを飛鳥時代に持つ多くの社寺がある。2014年には奈良県下の市町村で初めて国の認定を受けた「歴史的風致維持向上計画」を策定し、豊富な歴史的・文化的資源や自然環境が一体となった「歴史的風致」を後世に継承することを目指している。

これらの歴史・文化は、観光地としての同町の価値を大いに高めており、同町は国内外の観光客にとって非常に魅力的な観光地となっている。

第2期斑鳩町まち・ひと・しごと創生総合戦略（まちづくりの重点施策）

1. 元気な“斑鳩っ子”を増やすための支援

子育て世代の希望が叶うまち“斑鳩”的実現

教育の充実と郷土愛の育成

2. “世界遺産 法隆寺”を核としたにぎわいと活力の創出

交流人口拡大による観光の振興

斑鳩の特性を生かした産業の活性化と創業支援

3. 選ばれ続ける“斑鳩の里”づくり

転入・定住の促進

生涯にわたって健康で活躍できるまちづくり

安心してくらせる環境の充実

横断的視点
（多様な主体と連携したまちづくりを推進する
産官学連携や住民との協働など）
（新しい時代の流れをまちづくりの力に対する
未来技術の活用やSDGsの推進など）

○観光の課題

奈良県全体の観光の課題として京阪神方面からの日帰り客が多いことが挙げられる。日帰り客の多くは奈良市内を中心に周遊し、同町に立ち寄ることなく宿泊地に帰ることから、奈良県の観光客のうち同町を訪れる観光客は一部に留まっている。

また、同町の観光客は法隆寺だけを観光して帰る「点」型の観光が中心で町内経済への波及効果が小さいこと、さらには若年層になるに従い同町の認知度が低下するなどの課題もある。

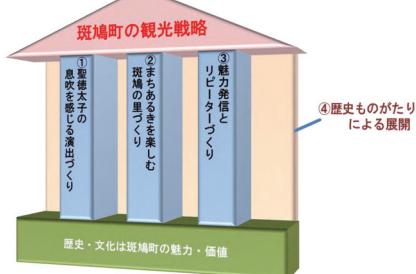
○観光振興に向けての戦略

同町ではこのような現状と課題を分析し、観光振興に必要な取組みの検討を行ってきた。「斑鳩町観光戦略」では、課題解決につながる戦略を掲げ、新たな取組みを進めている。

斑鳩町観光戦略（2017年～2026年）

《基本戦略》

- 「法隆寺」を中心の観光から「まちあるき観光」への転換をはかります。
- 新たな観光戦略を発展させ、「ワクワク・ドキドキするまち」を目指します。



○建築物の規制緩和

同町では2014年、条例改正で「法隆寺周辺地区特別用途地区」の指定を行った。法隆寺周辺約25ヘクタールについて建築物の規制緩和を実施し、景観形成を進めながら、商業施設の立地誘致を図っている。

この特別用途地区の活用に伴い、これまで飲食店や物品販売店が出店されたほか、2019年には法隆寺の参道沿いに宿坊をコンセプトにした宿泊施設がオープンするなど、「まちあるき観光」のためのインフラは徐々に整いつつある。

また、民間誘致により、法隆寺門前の町有地

(旧町営駐車場)にマルシェやレストランを併設した宿泊施設を整備する計画が進んでおり、コロナ禍で開業時期は見直されたものの、今後の観光拠点として機能していくことが期待される。

○未来技術の活用

情報通信技術をはじめとする未来技術を地域の特性を踏まえてうまく活用していくことは、観光振興を軸とした地方創生・地域活性化に不可欠な取組みとなっている。

同町ではIT企業と連携し、町内数か所にセンサーを設置、スマートフォンから入手したデータを基に町内における人流データを分析し観光戦略に活用する取組みを2020年から始めた。これまで詳細な分析が困難であった観光客の属性別の移動状況などが把握できるようになり、今後ともデータ収集を継続し観光戦略に生かしていく予定である。

○広域連携

京阪神方面からの日帰り客による「点」型の観光からまちあるき観光へのシフトを進めるにあたっては、周辺自治体にある観光資源もあわせてインフラ整備を図っていくことが、より魅力あふれる観光地域づくりにつながる。

2021年4月、奈良県生駒郡4町（斑鳩町、三郷町、安堵町、平群町）と大和郡山市、王寺町の1市5町が連携し、「WEST NARA 広域観光推進協議会」を発足させた。中西町長は本協議会の会長として、地域DMOや日本政府観光局とも連携し、アフターコロナを見据え、新たな観光商品の開発や観光プロモーションの強化に取り組んでいく。

○聖徳太子1400年御遠忌

2021年は聖徳太子の没後1400年にあたる。同町としても「聖徳太子ゆかりのまち・斑鳩町」をアピールできる絶好の機会であったが、コロナ禍においてイベントなどの延期・中止を余儀なくされた。

法隆寺参道や門前広場に木製灯籠などのあかりを灯し聖徳太子を町全体で偲ぶ『「和のあかり」プロジェクト』や、法隆寺中門前の特設舞台での

金剛流宗家による能楽公演も、法隆寺の協力のもと3月、4月に実施予定であったが延期となった。

2023年は法隆寺の世界文化遺産登録30周年にあたり、同町では法隆寺とこれまで以上に連携し、「観光・歴史まちづくり」を推進していく。



2026年の斑鳩町の観光イメージ



聖徳太子1400年御遠忌
宣伝隊長「うまやどさん」

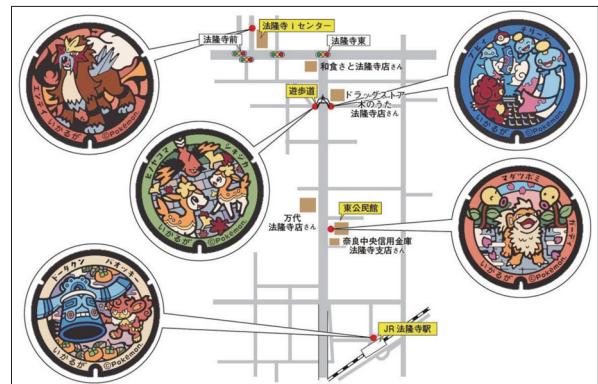
○法隆寺及びJR法隆寺駅周辺地区のまちづくり

同町は2018年3月、奈良県とまちづくりに関する包括協定を締結し、法隆寺及びJR法隆寺駅前周辺地区のまちづくりについて協働で検討や取組みを進めている。

まちあるき観光を推進するうえで、町の玄関口であるJR法隆寺駅から法隆寺までのアクセスや法起寺・法輪寺などその他の観光施設との回遊性を改善することは大きな課題となっており、現在様々な施策が検討されている。

その一環として、2021年1月、JR法隆寺駅から法隆寺に向かうルート上にアニメ・ポケットモンスターのキャラクターが描かれたマンホールのふた（通称ポケふた）を設置した。観光客が法隆寺までの道中を歩いて楽しめるための観光動線にするとともに、これまでの観光客とは異なるターゲット層の取り込みを目指した施策であったが、想定以上の反響があり、コロナ禍でのマイクロツーリズムの流れにうまく乗った形となった。

またJR法隆寺駅周辺地区については、奈良県と連携し幹線道路からのアクセス向上を進めるなど、交通拠点として交通結節機能や都市機能の向上を図っている。現在国道25号の混雑緩和のため斑鳩バイパス（いかるがパークウェイ〔新たつたみち〕）の整備が進められており、周遊観光の利便性向上が期待される。



JR法隆寺駅から法隆寺までの観光動線とポケふたの設置場所

4. 町の持続可能な発展に向けた取組み

同町は2017年、奈良県の自治体で初めて（全国でも4番目）「ゼロ・ウェイスト宣言」を行った。ごみを資源として活用することに最大限努力し、2027年度までにごみを燃やさない、埋め立てない町を目指している。生ごみや古紙、不燃ごみなどを細かく分別し再資源化に取組むことで、家庭からのごみの排出量の大幅削減を実現している（2019年度は1999年度比約37.5%減少）。

各自治体においては、地方創生にSDGsの手法を取り入れ、SDGsの17のゴールと諸施策を連携させることが、地域課題の有効な解決手段となる。同町がこれまで先駆的に行ってきたごみ減量はまさにSDGsの理念に合致した取組みである。住民、各種団体、行政が、SDGsのゴールを見据えた共通認識のもと連携を促進することで、町の持続可能な発展に貢献していく。

新しい総合計画のスタートと合わせ、同町では行政組織機構を再編し、同計画の諸施策を着実に実施していくための組織体制を確保した。これまで各課に分かれていた業務を横断的かつ戦略的に推進できるようになり、住民サービスの一層の向上が期待される。

聖徳太子の「和」の精神は、1400年の時を超えた新たなまちづくり計画に反映されている。これからも「和」の精神は、新しい時代の流れを取り込みながら、この地で次世代に受け継がれていくだろう。

（秋山利隆、丸尾尚史）